42
2020.4

放送番組センターレポート

BROADCAST PROGRAMMING CENTER OF JAPAN Report

公益財団法人　放送番組センター
〒231-0021 横浜市中区日本大通 11 横浜情報文化センター
TEL.045-222-2881 FAX.045-641-2110　http://www.bpcj.or.jp/

公開セミナー 第49回名作の舞台裏　『29歳のクリスマス』

12 月 14 日、テレビドラマの制作者や出演者が自らの番組を振り返る公開セミナー「名作の舞台裏」を開催した。今回は、1994 年にフジテレビで放送され、30 歳を目前にした女性の恋や仕事の悩みをリアルに描き、女性視聴者の絶大な支持を得たドラマ『29 歳のクリスマス』を取り上げた。

【ゲスト】
山口智子（出演）、**鎌田敏夫**（脚本）
【司　会】
中山和記（企画／放送人の会）

25 年前に放送された作品だが今なおファンが多く、セミナーには 1700 名を超える応募があった。

セミナー前半は最終回を上映。放送当時、主人公と同年代であった参加者は、当時を思い出しながら懐かしい画面に見入っていた。

後半は、主人公・典子を演じた山口智子氏、この作品で向田邦子賞を受賞した脚本家の鎌田敏夫氏、企画・制作の中山和記氏が登壇し、懐かしい作品の思い出話を繰り広げた。

今回のセミナーに合わせて全話見返したという山口氏が「本当に面白いドラマ。自分はテレビっ子なので、一般視聴者として感情移入して観てしまった。ずっしりと胸に迫る言葉の力に、心を揺さぶられるドラマだと改めて思った」と語ると、鎌田氏が「このドラマを書いたあと『女性の気持ちがよく分かりますね』と言われたが、あの時に一番自分の気持ちを託せたのが“29 歳で独身で働いている女性”だった。女性のことを書いたというよりも、自分の気持ちを託して書いた」と振り返った。

マライア・キャリーが歌った主題歌も大ヒットした。中山氏が「当時、マライアは全く無名の新人歌手で、タイアップしてくれるドラマや映画がないか世界中にオファーが出されていた。その情報をいち早くキャッチして聴いてみたら素晴らしい歌声だった。そしてこのドラマに合わせて『恋人たちのクリスマス』というタイトルで日本で発売した後、世界で発売することになった」と当時のいきさつを語った。また、企画当初、ドラマのタイトルがなかなか決まらなかったが、29 歳だった山口氏に合わせようという話をしていた所、主題歌が決まり、中山氏が何気なく『29 歳のクリスマス』と発言したところすぐに決定したという。「決まる時というのはそんな風にわりと簡単に決まるものなんですよ」と鎌田氏が笑った。

山口氏は「私自身が 29 歳という微妙な年代で、本当に自分の人生と重ね合わせながら、リアルな思いで演じた。『あっちにぶつかりこっちにぶつかりしながら、それでも私は自分の人生を、自分の力で歩んできた』というセリフがあったが、まさに、その頃の心境そのものだった」と振り返った。更に「『今ここにいる自分が好き、だから私は世界でいちばん幸せ』というセリフが魂に刻まれた。その言葉と共にずっと人生を歩ませていただいている」と続けた。

トーク中盤、山口氏が「あの瞬間は奇跡のようなことが起きていた。私一人の力では絶対に為し得ない。皆の力や時代のエネルギーも集結して、不思議な奇跡が起きていたような気がする」と語ると、鎌田氏が、このドラマを書

く前に仕事のストレスで“10円ハゲ”になった女性にたまたま会った話、山口氏が雨の中を走るトップシーンなどを話題にし、「典子が格好良く走ったらこのドラマは上手くいかなかった。あのみっともなさがあの時の典子だった。ドラマというのはそのような偶然が集まって出来ていく。自分が全部書いて上手くいくものでは決してない」と続けた。その後も、白金の家のロケハンの話、最終回の話など次々思い出話が続くと、山口氏が「携帯もない時代だから、会いに行かないと何も始まらない。家に帰ってくるのを戸口で待っていないとその人に会えない。その“待つという時間”を、誰もがもどかしく思いながら持っていた時代。待つことは本当にしんどい時間だが、今思うとあの辛さや歯がゆさが大切な時間だった。ドラマが生まれるには、待つ時間が大事なのかもしれない」と述べた。

海外に発つ恋人の木佐に典子が言った「200年でも私は待っている」というセリフを山口氏が懐かしむと、鎌田氏が「書かせてくれたのは役者さん。普通は100年や200年もなんて書かない。それを言っても大丈夫だろうという典子と木佐の相性のようなものがあったから安心して書いた。セリフというのは、自分が書くのではなく、俳優さんとキャッチボールしながら書いている。ぴゅっとボールが返ってきたら上手くいく」「連続ドラマは、ドラマを観ながらレンズのピントを合わせるように、修正しながら書いている。4話位でピントが合ってくる。それがぴたっと合うとそのドラマは上手くいく」など、脚本作りへの思いを語った。

このドラマは、典子の気持ちが文字になって画面に現れる。トーク後半には、その思い出の名言を山口氏がピックアップして披露した。「友だちは大事、友だちはじゃま」「いっぱい親不孝して子供は大人になっていく」「足の傷、心の傷、傷だらけの私が好き」「大声で叫びたいことがある。でもなんと叫んだらいいのかわからない」「一度のキスで夢中になれた頃があったのに」「年だけ大人、心はまだガキ」「別れではない。別れではない。別れではない」…。言い終えると、山口氏は「ずっと聞いていたい言葉ばかり。心に染み入る」と締めくくった。

会場に集まった参加者からは「心に響く言葉をたくさんもらった」「典子の言葉に励まされて生きてきた」など、多くの感謝の言葉が贈られた。

■企画展「スーパー戦隊 レジェンドヒストリー」

12月13日～2月16日、企画展「スーパー戦隊 レジェンドヒストリー～ゴレンジャーからリュウソウジャー、そして未来へ～」を開催した。会場では、スーパー戦隊全43作の歴史をパネルや台本で辿るとともに、撮影で使用された小道具ほか貴重な資料の展示でその魅力を紹介した。また会期中、握手＆撮影会やトークショー等の関連イベントも開催し、企画展示と共に盛り上がりをみせた。

「スーパー戦隊シリーズ」は、1975年にスタートした『秘密戦隊ゴレンジャー』から始まり、40年以上の長きにわたってテレビ朝日系で放送されている特撮テレビドラマシリーズである。シリーズの歴史を展示会で振り返るのは初の試みで、会場には子供から大人まで幅広い年齢層が訪れた。

エントランスでは、シリーズ第1作『秘密戦隊ゴレンジャー』の立像が来場者を出迎えた。また企画展の目玉として、『ゴレンジャー』の貴重な資料である原案企画書を初展示した。

歴史を辿るコーナーでは、全43作品を1作ずつパネルで紹介。放送された時代の流行や出来事なども記されたパネルからは、作品の内容解説だけでなく、それぞれの時代と共に歩んできた重みが感じられた。実際の撮影で使用された武器などの小道具、ロボットも多数展示された。特に、2018年度に放送され話題となった『快盗戦隊ルパンレンジャーVS警察戦隊パトレンジャー』（以下『ルパパト』）はコーナーを拡大して紹介。多数の場面写真や、劇中に登場するマシーンのミニチュアの展示は、特撮ならではの醍醐味を感じられる見応えある展示となった。会場では、小道具の細部まで熱心に見入る姿が数多くみられた。

全作品のオープニング曲を集めた主題歌シアターでは、モニター前に溢れるほど人が集まる日もあるなど、連日大賑わいとなった。子供たちが主題歌

を合唱する微笑ましい姿もあった。歴代レッドヒーローの立像を集めたコーナーでは、来場者がお気に入りのヒーローと写真撮影を楽しんだ。さらに、歴代の制作者や出演者も多数来場し、スーパー戦隊への愛が溢れるメッセージを色紙に残した。

付設の「スーパー戦隊レジェンドシアター」では、厳選した60話を時代やテーマに沿って5つのプログラムに分け、上映を行った。なお本展の開催に合わせ、スーパー戦隊シリーズ82話を公開番組として追加し、8階の視聴フロアでは合計94話が見られるようになった。

期間中に36,192名が来場し、一日平均来場者数と総来場者数共に歴代企画展中2位を記録するなど、特撮を愛する全世代の熱気に満ち溢れた51日間となった。

■握手＆撮影会 「ルパンレッドとパトレン1号がやってくる!」

1月18日に『ルパパト』のレッドヒーローたちを招き、握手＆撮影会を開催した（1日3回、各回先着50組）。『ルパパト』は、特に若い女性たちから支持を集め、さらにスーパー戦隊シリーズ史上初めて「ギャラクシー賞月間賞」を受賞するなど、放送界でも話題となった作品である。

整理券配布開始時間には配布予定枚数を上回る人数が列を作り、放送終了から1年近く経っても変わらぬ人気の高さを伺わせた。撮影会の参加者は、玩具の武器を手にしたり衣装をまとったりと、思い思いの形でヒーローと写真に収まった。

■トークショー『救急戦隊ゴーゴーファイブ』『百獣戦隊ガオレンジャー』を語る!!

1月25日にゴーレッド役の西岡竜一朗氏らを招き『救急戦隊ゴーゴーファイブ（1999）』の、また2月1日にガオレッド役の金子昇氏らを招き『百獣戦隊ガオレンジャー（2001）』のトークショーを開催した。オーディションや撮影時の裏話に加え、サプライズゲストの登場やビデオメッセージの上映もあり、大いに盛り上がった。幼少時代に番組を視聴していた世代の参加者も多く、ゲストが当時の衣装を身に着けて登場シーンを再現した瞬間、会場は興奮に包まれた。トークでは、企画展についても言及。両日ともに登壇したプロデューサーの日笠淳氏が、「放送ライブラリーで企画展が実現したことで、スーパー戦隊シリーズが文化となった」と感慨深く語った。

■ACC TOKYO CREATIVITY AWARDS入賞作品発表会

1月11日、情文ホールで「2019 59th ACC TOKYO CREATIVITY AWARDS入賞作品発表会」を実施した。この賞は、一般社団法人ACCが主催する国内最大規模の広告コンクールであり、多くの広告クリエイターたちの目標ともなっている。今回から、ラジオCM部門にBカテゴリー「放送以外の音声広告」が加わった。

今回の発表会では、ラジオ・テレビCMのすべての入賞作品を中心に、全6部門11カテゴリーのうち6部門8カテゴリーのグランプリなど合計275作品、のべ581本の入賞CMを上映した。来場者は130人だった。

■番組を視聴する会　第8回 阪神・淡路大震災 関連番組

1月17・18日、「番組を視聴する会」の第8回として、「震災を伝える・記録する・考える～阪神・淡路大震災から25年～」を開催した。

2020年は、阪神・淡路大震災から25年目にあたる。今回は、1996年から2017年までに放送された番組の中から、10年目、15年目などの節目の年に放送された番組をはじめ、復興が被災地にもたらす問題点を浮き彫りにしたドキュメンタリーや、大災害に備える必要性を訴える番組など、在阪局制作の番組を中心にテレビ6本、ラジオ1本を取り上げた。来場者は146人だった。取り上げた番組は次の通り。

『報道特別番組　定点観測　～被災地・変容の記録～』（1996／読売テレビ）、『巨大地震　震度7！“その時”あなたは生き残れるか』（2005／関西テレビ）、『阪神・淡路大震災から15年　ラジオが伝えたこと・そして、伝えること』（2010／ラジオ関西）、『震災報道特別番組　明日へつなぐ記憶～震災16年』（2011／毎日放送）、『ETV特集“復興”はしたけれど　～神戸 新長田再開発・19年目の現実～』（2013／NHK）、『NNNドキュメント’15 阪神・淡路大震災から20年 ガレキの街の明暗 ～誰のための復興か～』（2015／読売テレビ）、『阪神淡路防災家族会議　～南海トラフ巨大地震に備える～』（2017／サンテレビ）。

■第2回理事会を開催

2月28日開催の理事会で、令和2年度事業計画・収支予算を承認した。概要は以下の通り。

◇「公開番組の一層の増加」「事業の全国展開」「放送事業者の理解・協力の推進」「番組視聴システムの更新」を重点項目とし、事業の着実な取り組みを継続する。
◇放送事業者と連携し、保存対象番組の収集と公開を推進するほか、保存メディアの多様化に対応する番組複製基準の見直しを行う。
◇サテライト・ライブラリーは、実施施設での利用促進を支援し、阪神・淡路大震災の被災地で運用を開始する。教育利用では、中学･高校での本格運用に向けて環境整備を進める。
◇存在感を高めるイベントを開催する。
◇番組視聴システム更新を完了する。
◇収支予算は経常収益3億7,028万円、経常費用3億7,025万円を計上する。

■諮問委員会を開催

第28回（令和元年度）放送番組収集諮問委員会は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、書面会議の形式で3月17日に開催した。議題は以下の報告事項6項目。

(1) 「放送番組収集基準」の適用状況
(2) 番組の収集、保存、公開状況
(3) サテライト・ライブラリー及び大学での利用状況
(4) 令和2年度事業計画・収支予算
(5) ジャパンサーチへの連携状況
(6) 番組視聴システムの更新

委員からは、「過去に遡っての番組選定を引き続き推進してほしい」「サテライト・ライブラリーは、テーマや記念日等を活用して視聴イベントを行った成功事例を、各サテライトに紹介してはどうか」「教師向けセミナーを開催するなど、小中学校での利活用拡充が望まれる」「時代のスピードに取り残されない事業運営で、社会的存在意義を発揮してほしい」等の意見があった。

■公共施設･大学での番組利活用

【福井県ふるさと文学館】

12月21・22日、「吉村昭展～ふるさとと旅～」で、放送ライブラリーの公開番組から『青春の昭和史Ⅰ　遠い日の戦争』(1979／テレパック)、『新テレビ私の履歴書　吉村昭』(1990／日経映像)、『土曜ドラマスペシャル　それからの海』(2012／NHK)の3本が上映された。参加者からは「吉村作品を読むきっかけになった」等の感想が寄せられた。

【広島大学】

令和元年度後期、教養教育の「日本国憲法」（畑浩人講師）の授業で、テレビ番組1本が利用された。この講義は、憲法訴訟の裁判例を通して憲法への理解を深めることを目標としており、声帯を失った中津川市会議員が議会に「代読」を求めた憲法訴訟について取り上げた『NNNドキュメント'07　声の壁　発言できない議員』（2007／中京テレビ放送）が利用された。

■ 2019.12 ～ 2020.2の新公開番組

【テレビ番組】

『NNN ドキュメント'17 "土"は流された北海道・台風被害の爪痕』
2017.05.29 ／札幌テレビ放送
『連続ドラマ　火消し屋小町〔1〕』
2004.07.12 ／ NHK
『満州を忘れない 軽井沢に生きる開拓者の子供たち』
2018.3.14 ／長野朝日放送

【ラジオ番組】

『柳美里の「ふたりとひとり」と南相馬ひばり FM の7年のあゆみ』
2018.03.11 ／ラジオ福島
『CBC ラジオ特集　あなたとわたし』
2019.05.26 ／ CBC ラジオ
など、テレビ 153 本、ラジオ 21 本。

放送ライブラリー臨時休館

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、放送ライブラリーは2月29日（土）から当面の間、臨時休館に入った。状況に応じて、再開の期を見定める。

新公開番組 PICK UP!

ミステリアス斎宮 ～祈る皇女斎王のみやこ斎宮～

2016.5.20 ／三重テレビ放送
出演：榎木孝明、桐島ココほか
プロデューサー：一色克美、小川秀幸

国内有数のパワースポットとして、毎年多くの人が訪れる伊勢神宮。祭祀を行うため都より遣わされた皇女「斎王」と、斎王が暮らした「斎宮」の存在は以前から伝えられてきたが、室町時代に斎王制度は廃絶し、長い間謎に包まれていた。ところが、1970 年代の宅地開発に伴う発掘調査で、伊勢神宮から約 15 キロ離れた三重県多気郡明和町に斎宮が存在したことが確認された。発掘は今も続いており、2015 年には「日本遺産」として文化庁に認定されるなど、注目を集めている。

番組では、歴史探偵に扮した俳優・榎木孝明と、その助手として三重県出身の女優・桐島ココが、斎王と斎宮の謎を解き明かしていく。660 年の歴史の中で、約 60 人の斎王を受け入れてきた斎宮。歴代斎王のエピソードは、政治に翻弄された姉弟愛や、伊勢物語のモデルとなった恋愛劇など、皇女とはいえ人間らしく親しみやすいものが多い。地元局ならではの取材も見所のひとつだ。

調査や研究が進むにつれ、新事実が発見されたり、それまでの定説が覆されることはしばしばある。教養番組は、新しい知見を取り入れ、様々なテーマを掘り下げて分かりやすく伝えてくれる。知識のアップデートに最適な教材としても楽しむことができる。

◆放送ライブラリー公開番組数

テレビ番組 17,177 本／ラジオ番組 4,602 本／テレビ・ラジオ CM11,666 本／劇場用ニュース映画 2,683 項目　（2020.3.31 現在）